

## 平成29年度アドバイザーボード会議録

日 時：平成29年7月7日（金）15：30～17：20

場 所：本部棟3階中会議室

出席者：学外委員4名、学内委員8名及び学長

開始に先立ち学長から挨拶があり、その後、それぞれの議題について委員長から配布資料に基づき説明を行った。

各議題における委員からの意見については以下のとおりである。

### 1. アドバイザーボードに関する要項に定める第2条各号について

学外委員：学位規則に関して、第7条において「研究科委員会は前2項で定める以外の教員又は他の大学の大学院若しくは研究所等の教員等を審査委員に加えることができる」とあるが、このような者を過去に登用した実績はあるのか。

委員長：実績はある。これまでかなり頻繁に行われている。

学外委員：学位論文審査の取扱いに関する申合せ第1について、「審査機関のある学会等の論文集に課程博士にあつては1編以上掲載されていること」とあり、また、ディプロマポリシーには国際的なコミュニケーション能力を必要とする旨記載があるが、英文による論文の必要性についてどのように考えているのか。

委員長：優れた研究業績を上げたと認められる者については短縮して修了することがあり、この場合は3編以上掲載されていることを要件とする場合がある。英文による論文の必要性についてはその分野によるところが多く、論文誌によっては日本文の方が望ましいこともある。

学外委員：大学院博士後期課程担当教員の資格基準について、研究指導担当として論文数が20編以上と規定されているが、これは査読付きのものが20編以上必要であるという理解でよろしいか。

委員長：当然のこととして査読付きのものとしている。

### 2. 新カリキュラム適用後修了した学生の状況について

委員長：学生の状況について、アドバイザーボード発足当初においては、日本人学生、社会人学生、留学生の割合はそれぞれ1：1：1であったが、年が経つにつれこのバランスが変わってきており、現在は留学生の割合がかなり増え、社会人学生の割合が減っている状況である。

学外委員：現在在籍する学生のうち留学生が大きく占めるという状況は大学としてどのように捉えているのか。大学が掲げるアドミッションポリシーとミスマッチしているのではないか。

委員長：指摘はそのとおりである。

学外委員：博士前期課程の学生にとって、博士後期課程というものが魅力的なものになっているのか、前期課程学生と後期課程学生との間で情報の共有がどのようになっているのか、現状をお聞かせ願いたい。

学内委員：博士後期課程へ進学を困難とさせているものの一つに就職の問題がある。以前は高等専門学校等への就職先があったが、この状況が厳しくなっているのが現状である。就職状況が改善してくれば変わると思う。本学でも様々な取り組みをやっているのでもう少し長い目で見ていただければと思う。

学外委員：まだ導入後あまり時間がたっていないこともあるだろうが、インターンシップ（イノベーションチャレンジ）先とのつながりが広がれば、これも1つのきっかけになるかもしれない。

学 長：私が以前担当していた学生もイノベーションチャレンジ先との間で共同研究を行い、そこはこの学生自身の研究と近い分野にある企業ではあったが、このようなところを今後開拓する必要がある。

学外委員：平成26年に本会を発足した当初は、より魅力的な国際的な人物を輩出することを第一の目的としていたが、最近では学生の状況が変わったため、この目的にあまりこだわらなくていいのではと思うようになった。今後は大学が置かれている立場、特殊性を考慮しながら考えることが必要ではないのか。留学生が増え、社会人学生も少なくなっている現状もあり、留学生を含め総合的な教育の場を提供することを目的に変質してもいいのではないのか。少なくとも留学生が多くなっている現状を踏まえ教育の方法を考えてもいいのではないかと感じる。

ところで、資料22ページ（平成28年度大学博士後期課程修了者における進路状況）に記載された者で、昨年開催したドクコンに参加した者はどれくらいいるのか。

学内委員：1年、2年生に参加者が多く、3年生は非常に参加者が少なかった。ドクコンの趣旨を浸透させることが少し難しかった。

委員 長：3年生は研究発表に縛られていたこともあって、最終的にはドクコンに参加する意識が薄かったように思う。

学外委員：先ほど別の委員から話のあったことについて、大学という場なので、ある程度多様な人材を輩出することに対応できればいいのではないのか。また、博士後期課程の学生について、企業から見ると即戦力となりうる博士後期課程学生を輩出できればより採用しやすくなるのではないのか。

### 3. 博士後期課程学生を対象としたアンケート調査結果について

学外委員：イノベーション特論とは具体的にどのような講演を実施しているのか。

委員 長：産業界、他大学から講演者を招き、自身の研究分野に限らない視点から技術者・研究者としての知識を身につけることを目的とした講演を行っている。講演の聴講対象者を地域住民の方を交えた形で実施する「蘭岳セミナー」もこれに含めており、これまで JAXA 等の他機関から講演者を招き実施している。

4. 博士後期課程教育課程学生と企業等の出会いの場（ドクコン）の報告について  
本題については学内委員から配布資料に基づき説明を行った。  
（委員からの意見は特になし。）

5. 海外インターンシップ（イアエステインターンシップ）について  
本題については学内委員から配布資料に基づき説明を行った。  
（委員からの意見は特になし。）

6. 文部科学省で検討している大学における工学系教育の在り方について  
学外委員：紹介いただいた文科省からの答申について、このようなものはしばしば（文科省から）行われているのか。  
委員 長：中教審からのものについては度々発表されることもあるが、今回のものについては工学教育に特化した内容となっており特殊なものである。本学は学部の改組を計画しており、今回の資料はこれに大きく関わるものであったので紹介したものである。

以 上